

異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての  
「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題 (22)  
—「他者のメディア表象」への「拘り」の意義—

青 木 順 子

Why do we have to take 'Media Representation of Others' seriously?

Junko AOKI

英語英米文学科, 文学部,  
安田女子大学

要 旨

2018年後半から2019年前半にかけてのアカデミー賞作品賞を受賞した映画、米国NBC局のキャスターの「ブラックフェース」発言等、社会で論争を引き起こした例を基にして、「拘り」の表明、「拘り」に対する反応、反論、言い訳に見えてくるものを検証し、「拘り」の持つ性質と意義について考察をしている。自らの「拘り」への参加、他者の「拘り」の行為の受容、そして異なる意見の表明によって互いに真摯な応答の過程がなされていく社会を尊重し、「拘り」の表明によって、さらに異なる意見が自由に意見交換されるような空間——これは、カントのいう公共圏でもあり、アーレントが、レッシングの考えた真理の存在、「真理は、言語を通して人間化されるところのみ存在する」について述べたような、多様性を持つ人間が「真理だと思っているもの」を表明し語ることでのみ作り得る「唯一の人間的な空間」でもある。他者のメディア表象への「拘り」を尊重し、真摯に応答する行為を通して、「一人ひとりが・拘り・今・自分に・出来ることを、丁寧に問い・声をあげ、かつ、耳を傾け・異なる他者とのコミュニケーションを続け・それを通して得た真理を・実現しようとする」という異文化コミュニケーション教育の目標は達せられるのである。

キーワード：異文化コミュニケーション教育、異文化コミュニケーション、異文化教育、メディア表象、拘りの尊重

は じ め に

2018年に出した拙稿「『他者』のメディア表象への拘り」<sup>1)</sup>において、筆者はメディアにおける他者の表象に拘り、その背後の力の構造に気づき、互いに語り合うという行為の意味することに焦点をあてて論じた。その論稿で例として挙げたものの一つが「ホワイトウオッシュ」に関わる米国国内でおきた論争である。それに続く形で、本稿では、「異文化コミュニケーション教育」

の目標に入っている「拘り」の持つ性質とその意義について例とともに論じている。

### 1. アカデミー賞をめぐる「ホワイトウオッシュ」

2018年の論稿では、2016年から2017年のアカデミー賞をめぐっておきた「ホワイトウオッシュ」と呼ばれた批判を紹介した<sup>2)</sup>。こうした過去数年の激しい批判の時期を経ての2019年は、「ホワイトウオッシュ」であると批判されてきたアカデミー賞が多様性を受け入れて、ついに変化を見せたと言われた年となった。マイノリティグループである黒人を主人公とする映画、『ブラックパンサー』が3部門で受賞、スパイク・リーの『ブラック・クラウンズマン』は脚色賞を受賞、演技部門4賞のうち三つは白人以外の黒人俳優やエジプト系米国人が受賞するなど、多様性を具現したアカデミー賞授賞式と言われたのである。しかしその一方で、式の最後、式のハイライトでもあり、賞の中でも最高榮譽と考えられている作品賞は、公開時からすでに論争をおこしていた『グリーンブック』に与えられたことで、アカデミー賞が示した多様性に影を落としたと式後にも論争がひとしきり取り上げられることになった。例えば、「ニューヨーカー」は、この作品賞の選択は、2016年から17年にかけての「2016-2017ホワイトすぎるオスカー論争 (2016-17 #OscarsSoWhite controversy)」が有意義な変化を何も遂げられていないことの現れとなったと批判している<sup>3)</sup>。

映画は、1962年の米国、イタリア系アメリカ人のトニーが、黒人の天才ジャズピアニスト、ドクターの南部へのコンサートツアーの運転手として南部に同行、様々な出来事に遭遇して、お互いを理解し友情を育むにいたるロードムービーとなっている。トロント国際映画祭観客賞、ゴールデングローブ3部門受賞、アカデミー賞は作品賞を含め助演男優賞と脚本賞を受賞したこの映画が「商業的に成功した映画」であることは、今回の論争において批判する者も否定していない。受賞をするような作品にも、賛否両論、評価は真つ二つに分かれるという状況も過去から多くあったのだ。それにも関わらず、この論争が大きくなったのは、論争が映画の好みという次元にはなかったことにある。「人種差別を扱った映画」として公開時から論争があり、その論争を生んでいた作品がアカデミー作品賞に選ばれたことで、アカデミー賞の選択の是非も含めての大論争となったのである。論争をすでに引き起こしている作品を作品賞という榮譽に相応しいとした事実が意味すること—それも看過できないとする人々がいたということである。

### 2. 「人種差別についての映画」であること

『グリーンブック』をめぐる批判の理由は、主に二つあるといえよう。この二つは相互に関係し合っており、実際は切り離すことは難しいともいえるが、ここでは考察の便宜上分けて記してみたい。まず一つ目は、『グリーンブック』が、白人によって、白人の視点で語られた、白人の側に都合のよい黒人の物語である点である。この批判は、映画の脚本が白人であるトニーの息子によって書かれており、映画の内容については実際とは違うと黒人であるドクターの親族が強く否定していることにも示されている。実話に基づくとされる映画が実際には多くの点で史実に基づいていないことはよくある。映画化にあたって、メディアの特性や大衆へのアピールという点で意図的に変更されることも多々ある。しかしよくある史実と異なる映画ゆえの批判との違いは、『グリーンブック』への批判は、映画のストーリーが「白人側に都合のよいように変更され

ている」と見えるために批判されている点にある。「(ドクターが) トニーと友達になったという事実はない」、映画は「嘘が謳われた交響曲」、「白人救世主の映画」であり<sup>4)</sup>、「黒人の人生の白人男性版の描写」である<sup>5)</sup>と、ドクターの親族は強い言葉で映画を批判している。

二つ目は、必然的に一つ目と密接に関係しているわけだが、黒人と白人という異なった人種でも、個人が直接関わりあえば理解し合える、素晴らしい友情に行きつくという、極端に単純化した図式そのものへの反発がある。組織的な差別構造、そのために起きる構造的不正義自体が長い月日解決もされないで残り続けている社会の実態を完全に無視して、これこそが解決であると描く、または描き続ける者の鈍感さへの反感である。

『グリーンブック』は、公開時から1990年アカデミー作品賞に選ばれた『ドライビングMiss デイジー』との類似性を指摘されてきた。『ドライビングMiss デイジー』は南部のユダヤ系白人女性が黒人運転手と心を通わせていき、『グリーンブック』では、黒人ピアニストと白人運転手が友情を育む、一体一の間人間関係を持つことで分かりあえていくという図式である。白人に取って心地のよい物語という類似の批判は1990年当時『ドライビングMiss デイジー』にもあったといわれているが、30年もの月日を経て、類似が指摘される映画が作品賞を取るということは、そこに変わらない「普遍的にアカデミーに好まれる要素」があったことになる。その要素の継続こそが、まさしく批判の理由でもある、白人側に都合のよいストーリーを提示し続けること、なのだ。それが、「ニューヨーカー」での「不愉快な鈍感さ (“repellently obtuse”)」、ガーディアン紙での「善意からの白と黒のバランスがうわべだけとなっている (“‘well-intentioned white/black balance’ came across as glib”」、インディペンデント紙での「容赦のない、ほとんど薄気味悪いほどの凡庸さ (“relentless, almost uncanny mediocrity”）」という批判に繋がる<sup>6)</sup>。この映画の物語を「たわごと (“bullshit”）」と一刀両断に切り捨てた批判もある。人種差別について白人に都合よく描かれた映画とは、一時的に聴衆に実際には存在しない誤解を与え、結局、人種差別を描きながら、人種の偏見自体には何の脅威も与えないものとなるからである。

これはしばしば二つの人種間を扱った映画の作動原理となる。つまり、双方が自分達の偏見を克服し、お互いの人間性を認め、聴衆は、人種差別は訂正されたのだ、または、少なくとも、自分達は前ほど人種差別者ではないのだと、一時的には満足して家路につくというものだ。<sup>7)</sup>

『グリーンブック』は自らの考えを変える人種差別者という夢を提供しているが、人種の偏見をどんな形でも脅かすものではないやり方だ。平穏な楽天主義の青白い光を伴って、残虐な行為、考え、態度といったものを、計算された心温まる上機嫌さで見せるやり方なのだ。並外れた努力や危険との直面を通して人の心は変化するという見方なのだ。満ち溢れる希望、変更される法律、克服される習慣といった映画の埋め込まれた雰囲気は、この映画の砂上の楼閣を打ち倒すような反応を得ることだろう。つまり、たわごとだと。<sup>8)</sup>

厳しく批判し、かつその批判の理由を丁寧に続けているものを二つ紹介しながら、『グリーンブック』はなぜ批判されるべきと考えられたのかについて、さらに詳しく見ていきたい。『グリーンブック』は白人のために白人によって作られた人種差別についての映画である。その問題が分かりますか? (“‘The Green Book’ is a movie about racism, made by white people for white people. See the problem?”)<sup>9)</sup> という論稿で、NBC局のジャーナリスト、ミラーは、多くの批判で一貫して言われている「白人のために白人が作った人種差別についての映画」、言い換えれば、「白人のため (白人の気持ちをよくするため)」「白人が作った」「人種差別についての映画」という三つの点が結合した映画、になっている点について、そうすることが元々意図的であったかど

うかは問題ではなく、「結果」としてそうなっていることに問題があると強調する。自分は、『グリーンブック』を楽しむような、憎しみに満ちているわけでもなく、人種差別者でもない、そうした人々を知っているし、彼らを受してもいるだろうが、それでも自分が拘るしかないのは、映画が、「白人のために、白人によって書かれ、監督され、作り上げられた（そのほとんど誰もがヘイトクライムの危険にあったことなど一度もない）」上に、人種差別を扱った映画のすべきことを放棄しているからであるという。

もし『グリーンブック』が人種差別に反対する映画として真剣に受け取られたいのであれば、実際、映画はそのように位置付けているのだが、人種差別の生きる現実やそれが最も直接に影響を与えてきた、（そして、まだ影響を与えている）人々に、徹底的に誠実な方法で向きあわなければならない。そして、そうした人々が『グリーンブック』を見てよい気分で立ち去るような人々ではない時には、『グリーンブック』はその目的を達成してはいないのだ。<sup>10)</sup>

「映画が聴衆をよい気分させることがどうして悪いのだ」と反論する者はいらるだろうと認め、それに対して明確に応答することで批判を展開しているのは、「Collider.com」の編集デスクであるゴールドバーグである。「『グリーンブック』と気分が悪くなることの重要性」（“‘Green Book’ and The Importance of Feeling Bad”）<sup>11)</sup>において、よい気分映画がさせることの何が悪いのか。それは、よい気分させることで、より望ましい方向へ行くことを妨げているからだ。と彼は指摘する。『グリーンブック』という映画が社会的意識をもって「人種差別」を語っているとされているがゆえに、そこで与えられるとする安易な希望—二人の異なる人種の人間が互いに理解をして人種差別を超える—は人々の持つ希望になる。しかし、それ自体は希望ではなく「願望」なのである。それは、組織的な人種差別からは目を逸らさせる方向に行かせるがゆえに、与えること自体が無責任になる。

希望とは結構な物である。しかし、文脈と労力から切り離されて、概ね「願望」と区別できないことになる。人々がお互いに優しくする限り人種差別は消え去るというのは、子どもっぽい見方、ひどく無責任に見える見方なのである。共感や理解をすすめさせるより、むしろ白人の観衆を優しく癒すことを意図した視点だ。「あなたが個人的に黒人の人に優しくするのであれば、あなたは、私たちの社会に影響を与えている、より大規模な組織的な人種差別と対決する必要はないですよ」というメッセージだ。『グリーンブック』は「私のベストフレンドには黒人もいます」的映画といえるのである。<sup>12)</sup>

彼は、50年前にすでに、そしてそれ以後も作られてきたような、この二人の人物がお互いを理解して友達になるというパターンの映画を<sup>13)</sup>、今、2019年に制作することの無意味さを嘆くのである。50年もの間実際には解決できなかった組織的な人種差別を、またもや安易な希望で、真の解決から逸らす形で提示する無神経さ、責任感の欠如を、である。映画が「エンターテインメント」であり、組織的な人種差別を扱うような映画が売れないことも彼は分かっている。どうあるべきかについて簡単な答えがないことも、である。それでも、『グリーンブック』にあったような、人種差別をテーマとして作られた映画が2019年の今私達が持っている責任を放棄していることは問題なのである。だからこそ、希望を与えるポーズをとりながら努力もせず、よい気分白人をちょっとだけさせること、今そのどこに意味が見いだせるのか、と問いかけるのである。

『グリーンブック』はあなたを米国における進歩についていい気分させたいのである。それに対して何の仕事もせずに、また、二人の主要登場人物よりずっと大きい組織的な人種差別については無視をして、である。(中略) そう。組織的な人種差別を扱う映画ははるかに強引な売り込みになるし、おそらく簡単な答えを提供できないだろう。それでも、(『グリーンブック』にあるような) 二人の人物がそれぞれの個人的偏見を認め、あとではお互いを今は尊敬していることを見せるために大事な握手をする、といったシーンはないだろう。もし私たちが、『グリーンブック』のような映画、そこでは、人種差別は過去のこと、レッドライニングや大量の投獄といった諸々の社会的要因より個人的な信念からくる、を提供し続けるなら、その時不正義は隠れ場所を見つけるだろう。それは、勝ち取ったわけではない暖かい居心地のよい感情と、学ばれないままの教訓の中に隠れてしまうだろう。私は、正しい理由によって私を嫌な気持ちにさせる映画の方が、悪い理由によって私をよい気持ちにしてくれる映画より、いいのだ。<sup>14)</sup>

批判する者達は、映画の出来を無視して映画の示す問題意識の高さを基準に作品賞を選べと言っているわけではない。彼等もまた作品賞とは、エンターテインメントとしての完成度の高い作品に与えられることを理解している。実際、『グリーンブック』について、全ての点で成功をおさめた観衆に受けるハリウッド映画であることを高く評価したワシントン・ポスト紙のような映画批評もある<sup>15)</sup>。それでも強く批判をするのは、映画が上述してきたような大きな問題を社会に提示してしまっていることを見逃ごせないからである。そうした批判者の一人、スパイク・リー(『ブラック・クランズマン』で脚色賞を受賞し、同作品で作品賞にもノミネートされていた)が、『グリーンブック』の作品賞受賞でのプロデューサーのスピーチの間に、憤然と会場を出ようとしてスタッフに止められたことや、後のインタビューでもアカデミーの選択に失望を隠さなかったことが、授賞式後の様々な報道で伝えられた。そのニュースを同じく伝えているインディペンデント紙の記事、「『グリーンブック』は作品賞を取るべきではなかった。しかし、『ブラック・クランズマン』も正しい選択ではなかったであろう (“Green Book’ shouldn’t have won Best Picture, but ‘BlackKlansman’ wouldn’t have been the right choice either”)<sup>16)</sup>で、『グリーンブック』は受賞するべきではなく残念な選択ではあるが、それでは、スパイク・リーの『ブラック・クランズマン』のように1970年代の社会を舞台に差別を描いた映画で、最後に2017年のバージニア州で起きた白人至上主義者と反対派の衝突の映像を唐突に入れて終わるような、問題は今も続いているというメッセージを込めれば、そちらの方が作品賞として適切だ—という単純な答えではないと述べている。『グリーンブック』が現在の構造的不正義について問いかけをしていないから、映画の流れや構造上の短所もある『ブラック・クランズマン』の方がまだ作品賞にふさわしい、という二者択一的なことではないのである。映画の中に有機的にテーマがうまくおさまってこそ大衆向けエンターテインメントとしての映画の価値もあることを十分理解しており、映画というメディアが多くの人々の琴線に触れる力をもってこそエンターテインメントとしての意味がある事実も分かっている。そうした高みをみせる適切な「人種差別」を扱う映画の受賞を見たいだけなのである。この記事はこう結ぶ。

黒人によって作られた黒人についての人種差別を扱う映画が、まさに同じことについて白人のレンズを通して語られた映画に負けてしまうことに失望する、そのことに私は疲れている、それを言っているのです。<sup>17)</sup>

これまで紹介したような『グリーンブック』を激しく批判した映画批評家やジャーナリストは

様々な言葉で丁寧に彼らの「拘り」を説明しているが、共通しているのは、なぜこの映画に彼らが拘るしかないのかという拘りの理由である。『グリーンブック』が人種差別をテーマとした映画と謳う以上、人種を超えた理解をきちんと扱ったような「フリ」は見過ごせない—拘りの共通した理由はまさにそこにあるのである。

### 3. 「批判への反論」に見えるもの

第2節で紹介したような批判には反論もある。まず、エンターテインメントとされるメディアの内容に「拘り」を見せると、必ずと言ってよいほど出てくるカウンター批判がある。その中でも一番多いのは、エンターテインメントとしてよい出来なのであれば、そこまで言う必要はない、という拘り過ぎへの批判といわれている。今回の『グリーンブック』の批判においても、カウンター批判は登場した。オンライン雑誌の編集長が保守的エンターテインメントブログにおいて、「どんなによくてもケチをつける者はいる」、「『グリーンブック』が」白人の聴衆の気分をよくさせるというのは失礼だ。変化する人々の偏見について語られた美しい物語を楽しむのに白人である必要が一体あるというのだろうか」という皮肉っぽいコメントを記すという具合に、である<sup>18)</sup>。

さらには、批判の内容に対しての激しい反発が関係者からも示された。『グリーンブック』の製作者側からの直接の反論であり、反論の受け取り手が公開したことで内容が世間に知られることになる。前節で紹介したように、NBC局のジャーナリストであるミラーは、『グリーンブック』は白人による白人のための映画であり、人種差別に反対する映画という位置付けをとっている以上、もっと誠実に差別の現実を直視すべきだと指摘している。その記事を発表後に、『グリーンブック』のプロデューサーの一人である、ウェスラーからEメールが直接彼女に送付されてきたとして紹介している。文面の一部は「アフリカン・アメリカンは、概ねこの映画を『とても気に入っている（“LOVE”）』、「あなたがどんなに間違っているかについて書き連ねる気はないが、あなたはNBC局で書いている時には『真実』について書く、『大きな、くそ責任とやら（“a big ASS responsibility”）』があるのだ。実際は、あなたはFOXのレポーターのように書いている。<sup>19)</sup>」これに対して、「ヴァニティフェア」誌の映画批評家コリンズは、は、自分の書いた批判の批評に対しては、これより、「もっと軽蔑的で、非難をこめて長たらしい（“more finger-waggy and longer-winded”）」メールを同プロデューサーが送ってきたことを明かした<sup>20)</sup>。

この出来事は、少なくとも『グリーンブック』の制作者の一人は、映画への批判自体に真っ向から反発し、上品とは言えない言葉で、批判者を攻撃したという事実を示すものとなった。応答のスタイルが喧嘩の体を呈したレベルであり、批判に対してどの部分にも応答しない、説明を試みない、そして、極めて攻撃的に批判者を非難するだけというコミュニケーションのスタイルは、『グリーンブック』が少なくとも一人は強い偏見の態度を持つ人間の手によるものだと世間に知らせることになったといえる。この一件は映画を批判した者の『グリーンブック』へ持つ懸念を強めたといえるだろう。

「批判への反論」によって真実がより見える感があることについては、『グリーンブック』を選出したアカデミーそのものに関わる興味深い報道もあった。ホワイトすぎると批判を受けていた2017年、アカデミーの会長は、黒人女性シェリル・ブーン・アイザックスから74歳の白人男性ジョン・ベイリーになった。選出に対して、アカデミーの多様性を本当に推進できるのかと『ヴァラエティ』誌からコメントを求められた時に、「白人男性であることはどうしようもないじゃな

いか！」とベイリーは激高して反論したという。ELLE誌はそれを記した記事内でこう述べている。

ベイリー「個人」が白人であることも、男性であることも、老齢であることも、会長としての能力に疑いを抱く要素ではない。彼がなぜ反感を買ったのかといえば、アカデミーがまさに「なんら差し引かれることのない」マジョリティ集団の象徴となっているからだ。残念ながらアカデミー科学芸術協会(AMPAS)は、異様とも思えるマジョリティ、権力を持つ白人男性が占めている。会員にはそもそも映画界での成功が必要で、マイノリティが活躍する場自体が少ないハリウッドでは白人男性以外が会員になること自体難しい。人種や性別によってなんら制限されたことのない多数派は、マイノリティが負っているディスアドバンテージ自体が理解しづらい。その鈍感さこそが、マイノリティにとって「抵抗勢力」になることに多くの人は気づいている。白人のおじいさんであるベイリーは、それを映画界において肯定する“象徴”になってしまうのだ。その証拠に、一番いいチャンスをマイノリティの誰かに渡すこともせず、ちゃっかり自分の“都合”に利用してしまったのではないか、というわけ。<sup>21)</sup>

そして、こう続ける。「肯定されたマジョリティは必ず、自分の既得権を行使し、少数派の邪魔をし始めることは歴史が証明している。<sup>22)</sup>」残念なことにベイリーもまた、50代の女性CEOの権限に口出しをし始めて、他の取締役から懸念の声が出ていると報道されたことを記事は最後に伝えている。

#### 4. 「批判への言い訳」に見えるもの

アカデミー賞が「ホワイトウォッシュ」であると批判されている2017年、同じ言葉で批判されたのが米国のNBC局である。前述した2018年の論稿では、2017年の黒人キャスターのタムロン・ホールから白人保守派のミーガン・ケリーへの「Today Show」での交代劇をめぐる「ホワイトウォッシュ」論争を取り上げた<sup>23)</sup>。そのケリーがそのNBCの番組を担当し始めて1年以上過ぎた2018年の10月、ハロウィーンシーズンにおきたのが、彼女の「ブラックフェース」擁護発言である。以下に記す経緯は、「ミーガン・ケリーのNBC局離職についてあなたが知るべき全てのこと」(“Here’s Everything You need to know about Megyn Kelly’s NBC Exit”) <sup>24)</sup> に基づいてまとめたものである。なお、発言があった番組放送自体は、発言直後のインターネットで筆者も視聴しており、記事の説明の補足として使っている。2018年10月23日、ハロウィーンのコスチュームの話題が取り上げられる。「コスチュームポリスは、今年は今までにないくらい厳しく取り締まっている」とケリーが発言。その例としてカウボーイやネイティブアメリカンのようなPCから問題とされるコスチュームをあげ、「自分以外の何かになろうとするのがハロウィーンの目的ではないのかしら」と発言する。話題はアフリカン・アメリカンとして扮装するためにブラックフェースを使うことに移り、「ハロウィーンでブラックフェースをつける白人や、ハロウィーンでホワイトフェースをつける黒人なら問題になるけれど、自分が子どもの頃はキャラクターになって仮装する限りは問題なかったわ」と続ける。さらに女優が黒肌にしてダイアナ・ロスに扮装したことにも触れ「ダイアナ・ロスを愛していない人がいる？一日だけでもダイアナのように見えただけでしょう。ハロウィーンで人種差別者にどうやってなるのか分からないわ。」と言う。こうしたケリーの一連の発言は、「ハロウィーンなのに気にする人がいることに私は驚くのだけど」と何度も「ハロウィーンなのに」を笑顔で強調し、会場の聴衆に同意を求めるような形で与えられ、番組は最後まで和やかな雰囲気で行進していた。

しかし放送直後からソーシャル・メディアには人種差別的発言として批判が溢れかえることになる。こうした批判の嵐に、ケリーはNBCへの公開Eメールの形で同僚に向けてコメントを出し謝罪する。「今日は他の人々の意見を聞き、再考し、今日、この時代、もっとセンシティブである必要があると認識した」と伝える。「もっと理解、愛、センシティブティ、名誉について大切に考える時であり、その一部に自分もなりたい。」と記す。しかし彼女の発言への批判は止まらず、NBCの同僚達（ブローカーをはじめとする黒人男性のキャスターも含めて）からも厳しい意見が出る事態となり、翌日、ケリーは放送されるショー内でも謝罪をする。「この国で人種差別者によって酷いやり方で使われたブラックフェースの歴史を考えると、このコスチュームをよしとするのはとんでもないことが分かりました。ハロウィーンであれ、他の場合であれ、ダメなのです。私は今までPCを特別気に掛ける人間ではなかったですが、今は、自分達の歴史、特に人種と民族についてセンシティブであることの価値を理解しています。」と震える声で自分の認識の甘さと歴史に対する無知を言葉にして謝罪する。スタジオの聴衆は立ち上がって拍手をした。しかしながら、事態は沈静化せず、その週の終わりにはNBC局を立ち去ることが決まる。局内外からの批判が収まらなかった理由は、ケリーの謝罪の内容そのものに関わってくる。ブラックフェースの歴史的事実を長年米国の放送局でキャスターを務めてきたケリーが「知らない」というのはそもそも有り得ないのではないかという根本的な疑念を持たせたことに、彼女が謝罪だけでは発言を修復できなかった理由があると考えられる。「知っているからこそ」キャスターとして人々に影響を与え得る彼女が意図的に発言してみせたことを、人々はほぼ確信したのである。「拘り」を示す人々が批判を寄せたから、彼女は謝罪をしたけれども、もしハロウィーンの衣装ぐらいのことで「拘り」を示すのはどうだろうかという人々が躊躇えば、ケリーは謝罪をすることはなかったのである。結局、人々が今回示した「拘り」は、偏見を公共の場で示しながらも、それまで巧妙に論争を大きくさせないように切り抜けてきた、自称「PCを特別気に掛ける人間ではなかった」、全米で知れ渡っている人気キャスターをNBCの看板番組から立ち去らせる力を持ったのである。

2018年年末から2019年年頭にかけて、ブラックフェースをめぐるのは、世界のトップブランドであるプラダもグッチも激しい批判を受けて、商品の撤収を与儀なくされている。イタリアの高級ファッションブランド、プラダは2018年12月米国マンハッタンの店頭に展示していたブラックフェースそのものに見える人形、2019年2月、同じく高級ブランド、グッチが売り出したブラックフェースそのものに見えるセーター、そのどちらも激しい批判を受けて、慌てて謝罪をして撤収する。プラダの場合は、声明で、人形は「想像上の生き物であり、現実世界を意識したものではない」と説明し、ブラックフェースとは関係がないこと、また不快感を与える意図はなかったとし、すべての人種差別や差別的表現を拒絶するとした<sup>25)</sup>。グッチの場合は、ツイッターでの不快な思いをかけたことへのお詫び、続く声明では今回の出来事を教訓に変えるとのコメントが出される<sup>26)</sup>。大きな疑念は残った。世界中に長い間展開してきたグローバルブランドが、本当にブラックフェースについて知らなかったのか、そういうことがあり得るのかという疑念を二つのブランドが拭い去ったとは言い難い。多くの人々がその疑念を抱くしかない現実こそが、私達が執拗に拘り続けなければならない理由を示しているともいえる。



## 5. 多数派の視点で描かれる少数派

2019年のアカデミー作品賞にもノミネートされており、いくつもの賞を取るとされていた映画に『ボヘミアン・ラブソディ』がある。クイーンのカイーン・フレディ・マーキュリーを描いて世界的なヒットとともに、社会現象とまで言われた映画である。この映画の公開後の映画批評には厳しいものが多かった。内容に関わっての厳しい批評の多くは、性的少数派である同性愛者のマーキュリーを主人公としながら、その同性愛者の人生が異性愛者の視点で描かれている「ストレートウォッシュ（異性愛化）」映画となっているという批判である。この映画は明らかなホモフォビア（同性愛嫌悪）の体を見せているというものもいくつもある。マーキュリーは「同性愛嫌悪の伝記でスラットシェイミングをされた」と書いて、例として、映画での、彼が異性の恋人との関係だけを保ってさえいれば大丈夫だったのに、というニュアンスでの描き方、悪者として描かれているのは彼の同性の恋人という点を指摘しているのは、フォーブズ誌の批評<sup>27)</sup>である。マーキュリーが同性愛者だとカミングアウトする時には映画は自己嫌悪を抱える人物として彼を描き、彼の周りの異性愛者はそれを強めるような発言をし続ける、また例外はあってもほとんどの同性愛者は悪者で、マーキュリーを「異性愛者のファミリー」から切り離す役割を持っていることを例として挙げている批評もある<sup>28)</sup>。『グリーンブック』と同じく、社会で偏見の対象となる要素を持った人物が扱われる時、期待された公平さを裏切り、主流となっている側からの視点からの描写が意図的にされていると思われるなら、激しい失望と憤りがその拘りに示されることになる。

強い言葉で批判を記した中に、「映画は無意識の同性愛嫌悪に満ちている」と書いたアイリッシュ・タイムズ紙の批評がある<sup>29)</sup>。この中で、作家で、現代文学を研究し、『フレディ・マーキュリー』の執筆者でもあるラウアは、史実と映画が違うことはおいておいても、映画は「隠れた同性愛嫌悪の上演法で補強されたアナクロニズム、パラクロニズム、またはメタクロニズムの連続（“a succession of anachronisms, parachronisms or metachronisms underpinned by a latent homophobic dramaturgy”）」だと酷評する。彼によれば、この映画の中では、マーキュリーは、「彼のホモセクシュアリティに辱められているようなもの」で、まるで自分が何者であるかについて赦しを得ようとしている者のように描かれ、男性を求めることで罪をおかし、彼のセクシュアリティは、彼に間違った選択をさせ、彼の魂をダメにして、邪悪な影響をもたらすとされている。こうした映画について、ラウアは言う。

『ボヘミアン・ラブソディ』は、その無意識の同性愛への偏見でもって、どんな形でも映画の主人公への賛辞にはなっていないのだ。代わりに、クイーンの前メンバー二人が、典型的なブリティッシュロkkerとなった移民の子どもの記憶に新植民地主義のナイフをつきつけているのだ。生きている時は、フレディ・マーキュリーは彼の同性愛のために辱められ、最後の数カ月は彼の病気に対するタブロイドメディアに導かれた攻撃的な反応に直面し、そして今、芸術的な業績の生涯を、恥ずべき死後の復讐という、ほとんど隠されてもいない恥ずべき行為に歪め曲げる、異性愛規範性のレンズを通して、彼の人生は映し出されているのだ。<sup>30)</sup>

この映画に対して、ただ「何を自分は残念だと思うのか」について論じた論稿もある。同性愛の歴史研究者であるワシントン大学のローリー・マーホファーが、「The Conversation」に掲載したものである<sup>31)</sup>。マーホファーが映画に描かれなくて残念だったのは、映画の主人公であるク

イーンのマーキュリーが、1980年代にHIV陽性と診断された多くの人々と同じように、病だけでなく、政府の失策や世間の軽蔑の犠牲者になっていた点である。性的、人種的偏見が、そのままHIVの偏見と直結すると同時に、その偏見は、自らの危険性行為によって感染したという自身の責任であるという認識とも結びつく。彼女はこのように説明をした上で、米国政府の当時の対処は、「HIV感染者が死に向かうのを黙って放置した」状態に近いという。マーキュリー自身は1987年にエイズと診断され、抗HIV剤併用療法の開発を待つことはできずに亡くなった。

映画には明白な「同性愛嫌悪」は登場せず、それが示されたとしても微妙であるが、そうした状況は実際のマーキュリーの人生とは違っており、マーキュリー自身がカミングアウトをしなかったことについて、マーホファーはその理由もよく分かるし理解を示すのである。「反同性愛法」が施行されて、同性愛を広めることは禁止され、同性カップルの家族は「偽りの家族(“pretend families, not real families”）」とされていたのである。この時代、グラムロックやディスコミュージックシーンでは性的少数者のイメージはもてはやされてはいたが、その前提には、「本当の生活においては誰もが異性愛者である(“it was all predicated on everyone being straight in real life”）」が存在したとマーホファーは説明する。80年代に、マーキュリーがグラムロック的ないでたちをやめ、ゲイの世界で人気のあるスタイルに髭をカット、黒革ジャンを着て登場し始めた時、ファンの受けも悪かったという。映画がマーキュリーの寿命を縮めたのは彼自身の放蕩のように描かれていることについても本当ではないのである。だからこそ、「もっと実像に迫る伝記映画を」と彼女は言わないではいられない。「いつか、別の監督がもっと出来のいいマーキュリーの伝記映画を―彼が生きた歴史的な瞬間を、彼が向き合った困難を正確に描いた作品―を作ってほしい、彼はそれに値する。」と彼女は論稿をそう結んでいる。マーホファーの示した「拘り」への反応が、社会に存在する少数派への差別意識を白日のもとに曝け出させ、同時に、そこまで拘らなくてもいいのではと感じる人々が少なからずいることも示すことになる<sup>32)</sup>。結局、こうした人々の存在こそが、同性愛者研究者のマーホファーが論稿を書かずにはいられなかった理由なのである。映画はエンターテインメントとして大成功し、これ程多くの人々に影響を与えているのだ。彼女はだからこそ残念なのであり、拘るしかない。歴史に残るようなこの偉大なミュージシャンは、時代の中ではカミングアウトを出来ないとした性的マイノリティであり、当時、そのマイノリティグループと同一であるかのように扱われた最も偏見を引き起こし忌み嫌われた病であるエイズを自ら生き、最後は亡くなったのである。歴史に残るような音楽を創造しつつ、こうした困難を生きていたマーキュリーだからこそ、マーホファーは、「彼が生きた歴史的な瞬間」と「彼が向き合った困難」を正確に描いた作品をいつか見たい、と書かずにはいられないのである。「何を自分は残念だと思うのか」と「拘り」を少なくとも彼女は示す必要があると感じるのである。彼の抱えたもの全てを含めての人生を想うから、そして、彼のようにマイノリティグループである人生を今生きている者がいる、これからもある、そしてそうしたグループに強い偏見を持つ者は存在し続ける、その事実があるからこそ、どうしても表明したい「拘り」が存在する。

## 6. お わ り に

前節までに挙げてきたようなエンターテインメントの世界で、またファッションに関して、「拘り」が表明される時、必ず「こんなことで・ここまで」というカウンター批判が出る。「こんな

ことで・ここまで」—しかしどこまで私達はその言葉を使うべきなのだろうか。そもそも使うべきなのだろうか。「拘り」について表明することは、「拘り」に全て同意をなさないと人々に強要することとは全く別のことなのである。多大な影響力を持つメディアによって、また、その影響力を行使できる側の者によって、批判を巧妙に阻止しながら力行使して発する者への抵抗なのである<sup>33)</sup>。だから、「こんなことで・ここまで」というカウンター批判の使用に、私達は注意を払い敏感でいる必要がある。表明された「拘り」の行為そのものについて真っ向から反発する者だけでなく、「こんなことで・ここまで」と首を傾げて咄く者も、結果的には同じように「拘り」を止める勢力となる。前者は後者を巧妙に取り込みながら、意図的に、自分の反論をきちんと説明しないままに回答の過程を終えようとする。だから、私達は、信念に基づき丁寧な思考を経てきちんと表明された「拘り」の行為に対しては寛容であり、そうした「拘り」を表明する人々に対して公平でなければならない。「拘り」の表明によって、さらに異なる意見が自由に意見交換されるような、いわばカントのいう公共圏が保障されることが何よりも大事なのである。これは、アーレントがレッシング賞の受賞スピーチで、レッシングの考えた真理の存在、「真理は、言語を通して人間化される場所のみ存在する」について述べたような、多様性を持つ人間が「真理だと思っているもの」を表明し語ることでのみ作り得る「唯一の人間的な空間」でもある<sup>34)</sup>。自ら「拘り」を実践し、また他者の「拘り」を尊重し、真摯に耳を傾け、他者とのコミュニケーションを続ける、そうした過程を経て、最終的に辿り着く真理—その「真理を・実現しようとする」行動は、必然的に自らの共同体内での社会的・政治的闘争となっていくわけで、個々の覚悟が問われることになる。その行動が拠り所とすることになる「正義」と「覚悟の在り方」については、また機会を待って考察をしたいと考えている。

## (注)

1. 青木 順子「異文化コミュニケーション教育（異文化教育）の原点としての『我々』と『彼等』のコミュニケーション問題 (20)—異文化教育における『他者』のメディア表象—」安田女子大学紀要 No.46, pp.31-50, 2018.
2. 青木, pp.36-37.
3. “‘Green Book’ best pic win overshadows diverse Oscars,” *Ladysmith Gasette*, Feb.26, 2019. (“Richard Brody argued in *The New Yorker*, however, that ‘the repellently obtuse’ *Green Book* proved the academy had changed nothing meaningful since being berated over the 2016-17 #OscarsSoWhite controversy.”)
4. “‘Green Book’ best pic win overshadows diverse Oscars” (“The real-life of Ali’s character, the late pianist Don Shirley, denounced the film as a ‘symphony of lies’ while others described it as yet another ‘white savior movie.’”)
5. “Peter Farrelly’s *Green Book*: a white man’s version of a black man’s life?” *The Guardian*, Dec.23, 2018. (“Although the film’s message is ultimately uplifting, its execution has drawn criticism. Shirley’s niece, Carole Shirley Kimble, has disowned the project as ‘a depiction of a white man’s version of a black man’s life.’”)
6. “‘Green Book’ best pic win overshadows diverse Oscars”
7. “Peter Farrelly’s *Green Book*: a white man’s version of a black man’s life?” 日本語訳は筆者による。
8. “‘Green Book’ reviewed Peter Farrelly’s *Bland, Regressive Flip* on “*Driving Miss Daisy*.” *The New Yorker*, November 16, 2018. 日本語訳は筆者による。
9. “‘The *Green Book*’ is a movie about racism, made by white people for white people. See the problem?” (by Jenni Miller) *NBC news*, Nov.22, 2018.

10. “‘The Green Book’ is a movie about racism, made by white people for white people. See the problem?” 日本語訳は筆者による。
11. “‘Green Book’ and The Importance of Feeling Bad,”( by Matt Goldberg) Collider.com. February 25, 2019.
12. “‘Green Book’ and The Importance of Feeling Bad” 日本語訳は筆者による。
13. The Heat of the Night (1967) (邦題『夜の大走査線』)を指している。第40回アカデミー作品賞、主演男優賞、脚色賞受賞。この映画も、最後は黒人と白人の登場人物の握手で終わる。
14. “‘Green Book’ and The Importance of Feeling Bad”日本語訳は筆者による。
15. “‘Green Book’ fires on all cylinders, creating the kind of satisfying mainstream movie going experience that many observers thought Hollywood had forgotten how to make.” (“ ‘Green Book’ a Hollywood crowd-pleaser that triumphs on all fronts,” Washington Post, March 2, 2019)
16. “‘Green Book’ shouldn’t have won Best Picture, but ‘BlackKlansman’ wouldn’t have been the right choice either,” Independent, February 25, 2019.
17. “‘Green Book’ shouldn’t have won Best Picture, but ‘BlackKlansman’ wouldn’t have been the right choice either,” 日本語訳は筆者による。
18. “‘Green Book’ best pic win overshadows diverse Oscars” (“No matter how woke you go it’s never good. Enough,” tweeted Claire Lehmann, the founding of online magazine Qillette.” “Conservative entertainment blog Hollywood in Toto, which considers Tinseltown’s liberals as something of a bete noire, described the bonding theme in ‘Green Book’ as ‘noble.’ ‘Saying movies like ‘Green Book’ make white movie goes feel better is insulting,’ aid editor Christian Toto. ‘Why would you need to be white to enjoy a beautifully told story about moving past one’s bigotry?’)
19. “Green Book producer sent angry emails to critics of the film,” The Guardian, Feb.26, 2019. (“African Americans for the most part LOVE this film,” and adds: “I will not go on and on about how wrong you are but you have a big ASS responsibility to write the TRUTH when you write for NBC. You on the other hand are writing like a FOX reporter.”)
20. “Green Book producer sent angry emails to critics of the film.
21. 「2019年アカデミー賞を白けさせたおじいさん」[ELLE JAPAN]、2019年2月27日.
22. 「2019年アカデミー賞を白けさせたおじいさん」
23. 青木、pp.41-42.
24. “Here’s Everything You need to know about Megyn Kelly’s MBC Exit,” Goodhousekeeping, Oct 26, 2018.
25. 「プラダ製品に『ブラックフェース』との批判、店頭から撤去」CNN、2018年12月15日.
26. 「グッチが黒いセーターめぐり謝罪、黒人蔑視の批判受け」CNN、2019年2月8日.
27. “‘Bohemian Rhapsody’ Review: Freddie Mercury Gets Slut-Shamed In Homophobic Biopic,” Forbes, Oct. 24, 2018.
28. “An open letter to the many fans of Bohemian Rhapsody from a concerned queer,” CBC, Nov. 8, 2018.
29. “Freddie Mercury: Bohemian Rhapsody is no tribute. It’s full of unconscious homophobia,” The Irish Times, Nov.22, 2018.
30. “Freddie Mercury: Bohemian Rhapsody is no tribute. It’s full of unconscious homophobia” 日本語訳は筆者による。
31. “The Freddie Mercury story that goes untold in ‘Bohemian Rhapsody,’” The Conversation, February 23, 2019.
32. 英語のコメントは、(31)の論稿掲載のサイト「The Conversation」で記されている読者のコメント欄を参照。日本語のコメントは「映画『ボヘミアン・ラプソディ』が語らなかつたフレディの悲劇」(「Yahoo!ニュース」2019年3月4日)のコメント欄を参照。
34. アーレント、アンナ、仲正 昌樹 (訳)『暗い時代の人間性について』情況出版、2009年、pp.6-61.

[2019. 9. 26 受理]

コントリビューター：青木 克仁 教授 (生活デザイン学科)